

ヨブ記15-19章「励ましから譴責へ」

1A 責任の所在 15-17

1B 神への高慢 15

1C 知恵のない者 1-16

3C 悪者のもたえ苦しみ 17-35

2B 神からの仕打ち 16-17

1C 友の敵意 16

1D 敵対する神 1-18

2D 天におられる保証人 19-22

2C 民の物笑い 17

2A 裁きの所在 18-19

1B 潰える悪者 18

2B 敵意を打ち滅ぼす方 19

1C 愛する者の遺棄 1-20

2C 生きておられる贖い主 21-29

本文

ヨブ記 15 章を開いてください。私たちは、ヨブと友人三人の議論の部分を読んでいます。ヨブの苦悩の言葉を聞いてそれに反応する友人たちですが、初めにエリファズ、次にビルダデ、それからツォファルが話しました。それぞれにヨブが答えました。そして 15 章から、再びエリファズが話し始めます。基本的に、友人三人の神学やその立場は変わっていません。内容もほとんど変わりません。変わるのは、励ましや慰めの言葉が全くなくなってしまったことです。ヨブを悪者の枠の中に押し込める、譴責(責め立てる)の言葉になっています。

三人、いやヨブ人もそうだったのですが、彼らの知っていた神学は、「正しい者がその報いを受け、悪者もその報いを受ける。」というものでした。第一弾では、彼らはその神学を一般真理として話していました。もちろん、ヨブも悪者としての報いを受けているのであろうという憶測を立てながらであります。一般真理を話しています。けれども、ヨブがそうではないと強く否定します。そして、ヨブ自身、「正しい者はその報いを受けるはずなのに、私は受けていない。神が意地悪しているのだ。」として、神への愚痴をこぼします。

その言葉を聞いて、友人たちはますます怒ります。ヨブの言葉が、ますます彼が悪者であることを補強しているのではないか、と思ったのです。ヨブの悪意を何とかして潰して、正さなければいけないという強い焦りを抱きます。第二弾は、その言葉を聞きます。

1A 責任の所在 15-17

1B 神への高慢 15

1C 知恵のない者 1-16

15:1 テマン人エリファズが答えて言った。15:2 知恵のある者はむなしい知識をもって答えるだろうか。東風によってその腹を満たすだろうか。15:3 彼は無益なことばを使って論じ、役に立たない論法で論じるだろうか。15:4 ところが、あなたは信仰を捨て、神に祈ることをやめている。15:5 それは、あなたの罪があなたの口に教え、あなたが悪賢い人の舌を選び取るからだ。15:6 あなたの口があなたを罪に定める。私ではない。あなたのくちびるがあなたに不利な証言をする。

エリファズは、今、この現代に生きていたら、なかり紳士的な、老齢の信者であると思います。彼が初めに口をヨブに対して開いた時は、「もし、だれかがあなたにあえて語りかけたら、あなたはそれに耐えられようか。」ヨブのことを、まず「知恵のある者は」と呼んでいます。「あなたは、知恵のある者であるはずではないか、なのに、なんでこんなことを言うのか。」という失望の思いが込められています。「むなしい知識」と訳されている言葉は、「風の知識」というのが直訳です。次に出てくる「東風」のことです。「シロッコ」と呼ばれるアラビア砂漠から吹いている風のことで、「植物を枯らし、人間を窒息させる熱風であります。つまり、熱く語っているがその言葉には意味がない、ということです。このように、ヨブが渾身を込めて自分の信仰を働かせて、神に対して愚痴という形ではありますが、本音を語ったその言葉を、熱くて無益な言葉とみなしました。

エリファズは、さらに断定します。ヨブが、信仰から外れ、祈ることもやめてしまったので、悪者が語る言葉を彼が選びとってしまった、と言っています。その言葉自体が、ヨブが罪を犯していることを定めていると断じました。

15:7 あなたは最初に生まれた人か。あなたは丘より先に生み出されたのか。15:8 あなたは神の会議にあずかり、あなたは知恵をひとり占めにしているのか。15:9 あなたが知っていることを、私たちは知らないのだろうか。あなたが悟るものは、私たちのうちに、ないのだろうか。15:10 私たちの中には白髪の者も、老いた者もいる。あなたの父よりもはるかに年上なのだ。15:11 神の慰めと、あなたに優しく話しかけられたことばとは、あなたにとっては取るに足りないものだろうか。

ヨブは、エリファズが言うように自分のほうが知恵に富むとは言っていませんでした。「あなたがたの知っていることは私も知っている。私はあなたがたに劣っていない。(13:2)」と言ったのみです。彼らと同じ神学をヨブも持っていたのです。けれども現実が、その神学に沿っていないことを彼は呻いているのです。そしてエリファズは、自分が年長であること、実にヨブの父よりも年上であることを述べました。彼の拠り頼むところは、「年長であるから知恵がある」ということでした。いや真実は、「年を経ても分かり得ない神の真実」というものがあります。年寄りであるとか、若者であるとかそういうことではなくて、人間として分からない現実は今、直面しているのです。

さらに、エリファズは、初めの時にヨブを慰め、優しく語りかけたのに厳しい、激しい言葉で返されて侮辱されたと感じています。ヨブも分かったようなふりをして、その善意に応える形で「はい、分かりました。」ということもできたのです。けれども、現実があまりにも苛酷であり、それはできませんでした。神に直球でこの疑問を投げかけなければ生きていけないと思ったのです。

15:12 なぜ、あなたは理性を失ったのか。なぜ、あなたの目はぎらつくのか。15:13 あなたが神に向かっていらだち、口からあのようなことばを吐くとは。

エリファズはおそらく、6章4節にあるようなヨブの言葉のことを言っているのだと思います。「全能者の矢が私に刺さり、私のたましいがその毒を飲み、神の脅かしが私に備えられている。」しかし、ヨブは肉体に走る激痛について、その感情を表現しているにしか過ぎません。ヨブに与えられていた確固たる信仰は、「主は与え、主は取られる。」であります。ですから、この痛みも神から来ているという神の試験をヨブは信じていました。

15:14 人がどうして、きよくありえようか。女から生まれた者が、どうして、正しくありえようか。15:15 見よ。神はご自身の聖なる者たちをも信頼しない。天も神の目にはきよくない。15:16 まして忌みきらうべき汚れた者、不正を水のように飲む人間は、なおさらだ。

エリファズは、初めに話した時も同じことを話しました。それに対してヨブは、自分の受けている苦しみが自分の犯した罪によるものだとすると、あまりにも重すぎると訴えました。そして、自分が正しく、潔癖であると訴えたのです。ですからヨブは、エリファズの言っている原罪、人は誰もが罪を持っていて不完全だということを否定していないのです。

数多くの方が、エリファズと同じ過ちを犯します。例えば病については、もちろん性病など、自分が犯した罪に直接関わるものもあります。人を赦せず、苦みを持っているため鬱になり、心身に支障を来たしたということもあります。けれども、病は最初の人アダムが罪を犯したため、地上の中に入ってきたものであり、原罪から生じたものです。キリストが再び来られる時に、罪も取り除かれ、病も癒されます。しかし、その本人が犯した罪とは限らないのです。エリファズは、信仰の健全についての正しさを訴えているヨブの言葉を、原罪が無いと訴えているとみなしました。原罪と個々の罪を混同しているのです。

3C 悪者のもたえ苦しみ 17-35

15:17 私はあなたに告げよう。私に聞け。私の見たところを述べよう。15:18 それは知恵のある者たちが告げたもの、彼らの先祖が隠さなかったものだ。15:19 彼らにだけ、この地は与えられ、他国人はその中を通り過ぎなかった。

エリファズは、先の話では自分の神秘体験を持ちだして、神の知識と知恵を語りました。今は、

体験とビルダデと同じように先人の知恵を持ちだしています。外国の者たちが入ってきて、その思想が汚染される前に与えられていた、古代からの知恵ということです。

15:20 悪者はその一生の間、もだえ苦しむ。横暴な者にも、ある年数がたくわえられている。
15:21 その耳には恐ろしい音が聞こえ、平和なときにも荒らす者が彼を襲う。15:22 彼はやみから帰って来ることを信ぜず、彼は剣につけねらわれている。15:23 彼は食物を求めて、「どこだ。」と言いながら、さまよい、やみの日がすぐそこに用意されているのを知っている。15:24 苦難と苦悩とが彼をおびえさせ、戦いの備えをした王のように彼に打ち勝つ。15:25 それは彼が神に手向かい、全能者に対して高慢にふるまい、15:26 厚い盾の取っ手を取っておこがましくも神に向かって馳せかかるからだ。

彼の話していることは、基本的にヨブが受けている苦しみであります。平和な時に荒らす者が襲ったこと、剣につけ狙われているというのは、肉体に突き刺さっている痛みであり、そして闇の日は、死ぬ時が近づいていることを話しています。これらのことは、ヨブが言うような神がもたらしたのではなく、神に手向かって、高慢にふるまい、全能者に派向かっているからだということです。

15:27 また、彼は顔をあぶらでおおい、腰の回りは脂肪でふくれさせ、15:28 荒らされた町、人の住まない家に、石くれの山となる所に、住んだからだ。15:29 彼は富むこともなく、その財産も長くもたず、その影を地上に投げかけない。15:30 彼はやみからのがれることができず、炎がその若枝を枯らし、神の御口の息によって彼は追い払われる。15:31 迷わされて、むなしいことに信頼するな。その報いはむなしい。15:32 彼の時が来ないうちに、それは成し遂げられ、その葉は茂らない。15:33 彼は、ぶどうの木のように、その未熟の実を振り落とされ、オリーブの木のように、その花は落とされる。15:34 実に、神を敬わない者の仲間には実りが無い。わいろを使う者の天幕は火で焼き尽くされる。15:35 彼らは害毒をはらみ、悪意を生み、その腹は欺きの備えをしている。

27 節に出てくる油や脂肪は、高慢な心、神に対して鈍くなっている心を表しています。聖書では脂肪は、豊かさを示している時もあり、和解のいけにえは脂肪を神に対して焼くのは、豊かさは神のものであるという意味合いがあります。けれども、ここでは高慢であるということです。

そして、ここで降りかかっている災いは、不正な富によって悪を働いているので神から裁かれる、その富が根こそぎにされるということを話しています。ヨブが大富豪であったことにかこつけて、彼が富において罪を犯していると責めたのです。これは、もちろん根拠なき中傷です。ヨブは後で、長い格言を 27 章から 31 章までで話しますが、その中で一切、富について不正を犯したことがないと反論しています(31:24-25)。富は確かに人々を罪に陥れます。「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。(1テモテ 6:10)」ですから、富が与えられた、またその他のいろいろな意味の繁栄は、神から任された管理が増えたということであり、しっかり行わないといけません。

しかし、富や繁栄は、ヨブのようにしっかりと管理していても、罪を犯しているだろうという妬みや誹りを受ける機会となります。サタン本人も神に対して、「あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。(1:10)」と言いました。それが現実です。イエス様ご自身も、十字架の上で、「神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。(マタイ 27:40)」と叫ばれました。神の子という大きな特権、その高い地位と力が妬みと誹りの対象となったのです。

ここでエリファズの話は終わります。覚えていますか、彼はなんらヨブの回復について書いていません。4章 17節以降には、ヨブが立ち直った時に神が豊かに憐れんでくださる、その慰めの言葉が書かれていました。けれども、ヨブが悔い改めていないと判断して、悪者に降りかかる災いを宣言し終えたのでした。

2B 神からの仕打ち 16-17

1C 友の敵意 16

1D 敵対する神 1-18

16:1 ヨブは答えて言った。16:2 そのようなことを、私は何度も聞いた。あなたがたはみな、煩わしい慰め手だ。16:3 むなしなことばに終わりがあろうか。あなたは何に興奮して答えるのか。16:4 私もまた、あなたがたのように語るができる。もし、あなたがたが私の立場にあったなら、私はことばを連ねてあなたがたを攻撃し、あなたがたに向かって、頭を振ったことだろう。16:5 私は口先だけであなたがたを強くし、私のくちびるでの慰めをやめなかったことだろう。

「煩わしい慰め手だ」という言葉は、慰めを与えようとする者、カウンセリングをする者にとっては耳の痛いものです。ここの「煩わしい」は、エリファズの使った最後の言葉「害毒」と同じ言葉が使われています。慰め手として害にしかならない、その非難をそのままあなたに返すよ、という意味合いです。

そしてヨブの次の言葉は、興味深いです。彼の方がエリファズや友人たちよりも余裕があると言えるでしょう。もし反対の立場だったら、自分が受けている責めよりも、もっと多くを責めることができようと言っていることです。これはヨブが傲慢になっているのではなく、確かにヨブは正しく、潔癖に生きていました。彼らよりも非の打ちどころがなかったのでしょう。しかし、たとえ非があったとしても、自分はあなたがたを慰めて、強くしたであろうと言っています。事実エリファズ自身が、ヨブのことを「あなたは多くの人を訓戒し、弱った手を力づけた。あなたのことばはつまずく者を起こし、くずれおれるひざをしっかりと立たせた。(4:4-5)」と言っていましたから、慰める働きをヨブは行っていました。

人は、しばしばその非や欠点によって困難に陥るのです。しかし、そこからの立ち直りには、その失敗以上に、いやその失敗にさえ働いている神の恵みの手を見る必要があります。そこから、人は立ち直ることができます。そして、その失敗は神の恵みの中で、改めて悔い改めればよいので

す。多くの場合、自分が、これが過ちであったと思っていた点は、実は結果であって、もっと深いところで主の前に出ていく必要があります。神の恵みと憐れみに触れられて、神の御霊によって与えられることによって、改めてそうした悔い改めができるのです。

16:6 たとい、私が語っても、私の痛みは押えられない。たとい、私が忍んでも、どれだけ私からそれが去るだろう。16:7 まことに神は今、私を疲れさせた。あなたは私の仲間の者をことごとく荒らされました。16:8 あなたは私を、つかみました。私のやせ衰えた姿が、証人となり、私に向かって立ち、面と向かって答えをします。

ヨブは、友人に語りながら、その激しい痛みの中で再び嘆いています。新改訳では 7 節が、「私の仲間の者」と訳されていますが、新共同訳のように「一族」ということでしょう。ヨブは、エリファズが話した、一族が消え去るということを聞いて、それはヨブの罪のためだと彼は責めたのですが、ヨブは神が行われたのだ、と言っています。そして、今の皮だけになっている自分こそが、神が自分を掴んでいる何よりも証拠であると、言っています。そして神が自分に対して行っているとして、彼の嘆きはこれまで以上のものとなります。

16:9 神は怒って私を引き裂き、私を攻め立て、私に向かって歯ざしりした。私の敵は私に向かって目をぎらつかせる。16:10 彼らは私に向かって口を大きくあけ、そして私の頬を打ち、相集まって私を攻める。16:11 神は私を小僧っ子に渡し、悪者の手に投げ込まれる。16:12 私は安らかな身であったが、神は私を打ち砕き、私の首をつかまえて粉々にし、私を立ててご自分の的とされた。16:13 その射手たちは私を巡り囲み、神は私の内臓を容赦なく射抜き、私の胆汁を地に流した。16:14 神は私を打ち破って、破れに破れを加え、勇士のように私に向かって馳せかかる。16:15 私は荒布をはだに縫いつけ、私の角をちりの中に突き刺した。16:16 私の顔は泣いて赤くなり、私のまぶたには死の陰がある。16:17 しかし、私の手には暴虐がなく、私の祈りはきよい。16:18 地よ。私の血をおおうな。私の叫びに休み場所を与えるな。

ものすごい、激しい表現です。自分の身に起こったこと、すなわち一族が荒れ廃れてしまい、自分の健康までが蝕まれていることを、すべて神が行ったことだとして表現しています。11 節にある「小僧っ子」については、ヨブは 30 章にて詳しく話しますが、悪童がヨブの周りをうろついている状態です。これらのことをエリファズは、お前の罪によって引き起こされているのだと言っていました。それに対する反論をここで行っています。私の手には暴虐がないのだ、そして死んだら地の塵が私の証言となれ、という叫びであります。

ヨブはこのように徹底的に、彼の信じている神を信じていました。それは、すべてのことは神から来るという神の主権に対する信仰でした。この信仰に従えば、ヨブの側に罪がないのですから、その通り、神がこれほどまでに恐ろしく、残虐な方であるということになるのです。ヨブは、この神の知識を決して捨てることはありませんでした。しかし、次に全く矛盾しているようなことを話します。

神は自分を打つ矛だと言っているのに、19 節以降では神は自分の盾となる証人を信じているのです。まさに、矛と盾、矛盾しているのです。

2D 天におられる保証人 19-22

16:19 今でも天には、私の証人がおられます。私を保証してくださる方は高い所におられます。
16:20 私の友は私をあざけります。しかし、私の目は神に向かって涙を流します。16:21 その方が、人のために神にとりなしをしてくださいますように。人の子がその友のために。16:22 数年もたてば、私は帰らぬ旅路につくからです。

自分の友人たちは、彼をあざけりました。しかしヨブは、天には証人がいると言っています。自分を保証する方が高い所におられると言います。神と等しい所にいる、ということです。ここで思い出してください、ヨブは仲裁者がいるのかどうか、と言って悩んでいたのです。「神は私のように人間ではないから、私は「さあ、さばきの座にいっしょに行こう。」と申し入れることはできない。私たちふたりの上に手を置く仲裁者が私たちの間にはいない。(9:32-33)」しかし今、ヨブはこの保証人がいることを堅く信じているのです。この方はもちろん、神の右の座で執り成しをしておられる、私たちの主イエス・キリストです。族長時代に起こったと言われるこのヨブの物語において、世の初めから既におられた私たちの主は、このような形で、ヨブの信仰の中で現れてくださいました。

ここで、ヨブが神のことを「友」と呼んでいることに注目してください。21 節ですが、「人の子がその友のために」と訳されているのは、口語訳ですと、この仲裁者が「人とその友との間をさばいてくれるように。」となっています。つまりヨブは、神を自分の友と呼んでいるのです。分かりますか、ここに神はヨブを誇らしく思っておられるのです。こんなに神のことを訴えていても、なおのこと「友」と呼ぶヨブについて、神はサタンに、「おまえはわたしのしもべヨブに目を留めたか。(1:8)」と言われたのです。どうか、神に対して行儀良くならないでください。神は、皆さんをすでに知って、予め知っておられてご自分の子にしようとキリストにあって選ばれたのです。ゆえに、自分が神を知っている以上に、神にあなたが知られています。

2C 民の物笑い 17

今、数年も経てば、と言っていますが、あと僅かの間に、帰らぬ人となるとヨブは再び気を沈ませます。

17:1 私の霊は乱れ、私の日は尽き、私のものは墓場だけ。17:2 しかも、あざける者らが、私とともにおり、私の目は彼らの敵意の中で夜を過ごす。17:3 どうか、私を保証する者をあなたのそばに置いてください。ほかにだれか誓ってくれる者がありましようか。17:4 あなたが彼らの心を閉じて悟ることがないようにされたからです。それゆえ、あなたは彼らを高められないでしょう。

ヨブは自分のそばにいる友人たちのことを、「あざける者」といって嘆いています。そして既に夜

になったのでしょうか、この者たちと共に夜を過ごすのは敵意の中に過ごすと言っています。そして、彼らが心を頑なに立て、ヨブの正しさを信じないようになったのも、神の主権の中にあるということで、神が彼らの心を閉ざしたと言っています。しかし、心を閉ざした責任は彼らにあるので、彼らを高められないでしょうと神に言っています。

17:5 分け前を得るために友の告げ口をする者、その子らの目は衰え果てる。17:6 神は私を民の物笑いとされた。私は顔につばきをかけられる者となった。17:7 私の目は悲しみのためにかすみ、私のからだは影のようだ。17:8 正しい者はこのことに驚き、罪のない者は神を敬わない者に向かって憤る。17:9 義人は自分の道を保ち、手のきよい人は力を増し加える。

5 節の「分け前を得るために告げ口をする」とは、ヨブのことについて神の名によって責め立てている友人たちのことを言っています。彼らは、このような責め立てによって神から好意を得ようとしている、分け前を得ようとしていると言っています。そして、自分のところに今、やってきて物笑いとされていること、唾を吐きかけられていることは、そのまま起こっていたのでしょうか。ヨブはこのことを、正しい人、罪のない人が見たら驚くことだろうと言っています。正しい者に対してすることではないからです。

17:10 だが、あなたがたはみな、帰って来るがよい。私はあなたがたの中にひとりの知恵のある者も見いだすまい。17:11 私の日は過ぎ去り、私の企て、私の心に抱いたことも破れ去った。17:12 「夜は昼に変えられ、やみから光が近づく。」と言うが、17:13 もし私が、よみを私の住みかとして望み、やみに私の寝床をのべ、17:14 その穴に向かって、「おまえは私の父だ。」と言い、うじに向かって、「私の母、私の姉妹。」と言うのなら、17:15 私の望みはいったいどこにあるのか。だれが、私の望みを見つけよう。17:16 よみの深みに下っても、あるいは、共にちりの上に降りて行っても。

ヨブは、少し距離を置こうとした友人たちに対して、「あなたがたはみな、帰ってくるがよい」と言っています。そこには知恵ある者はいないが、と付け加えています。そして、12 節の言葉は、ツォファルが 11 章 17 節で、「あなたの一生は、…暗くても、それは朝のようになる。」と言っていたので、そんなことはないつつばやいているのです。極めてグロテスクな言い方ですが、死ぬための穴を自分の父と言い、自分の体に棲みついている蛆を「私の母、私の姉妹」と言っています。完全に、生きる意思を失ってしまった、死を待つばかりの絶望状態です。

このようにヨブは「光」を見失いました。光とは希望のことです。ヨブが最も苦しんでいたのは、自分で自分がこのように苦しんでいるのか分からないことでした。何のために苦しんでいるのか分からないことでした。人間は意味がなければ生きられない存在です。だから、何かが起こるとなぜなのかといつもと問い続けているのです。言い換えると、私たちは希望によって救われているのです。

2A 裁きの所在 18-19

次は、ビルダデの言葉になります。

1B 潰える悪者 18

18:1 そこでシュアハ人ビルダデが答えて言った。18:2 いつ、あなたがたはその話にけりをつけるのか。まず悟れ。それから私たちは語り合おう。18:3 なぜ、私たちは獣のようにみなされるのか。なぜ、あなたがたの目には汚れて見えるのか。18:4 怒って自分自身を引き裂く者よ。あなたのために地が見捨てられようか。岩がその所から移されようか。

エリファズが、もっと自分の経験も踏まえて、そこから自分の神学を語っているのに対して、ビルダデは神学の言葉だけを語っている男であります。エリファズは人と人が語っている、だから自分が優しく語りかけたのに、なぜそんな酷い言葉で返ってくるのか、という憤りを表していました。ビルダデは違います。彼は、「いつ、あなたがたはその話にけりをつけるのか。」と言っています。「早く、その訳の分からない話、終わらせてくれないか。」と言っているのです。

そして「その話にけり」という言葉をさらに詳しく話しますと、他の訳では「罨」と訳されています。言葉の罨にかけようとしているのか、ということです。ヨブの 16-17 章における言葉は、神を恨んでいるようでもあり、神に救いがあるようでもあり、そこに論旨の乱れがあり、それを言葉の罨だとビルダデは言っているのです。「そんな言葉の罨にかけようとしなくて、まず整理して、理解しなさい。それから話し合おうではないか。」ということです。血が通っていない言葉ですね。論理や知識は、時に私たちに心を失わせます。

しかし神の知識は、本当に人と人、心と心で得ていくものです。ところで私は、皆さんと共に育っています。もちろん前もって聖書知識をたくさん得ました。けれども、教会における御霊の賜物は、皆さんと共に働きます。ある方から悩みを聞きそのために祈り、御言葉を分かち合います。すると、不思議に他の似たような悩みを聞きます。その時には既に似た話を伺っていたので、何のこともをすぐに理解することができます。そして、既に理解が深められた御言葉をもってお話しすることができます。自分ではなく、御霊が運んでおられることを知る瞬間です。

そしてここ、ヨブ記を学んでいる時に、生きていくことについて悩みを持っている方々がおられ、力を受けています。しかしその前、私たちはエズラ記とネヘミヤ記を学んでいましたが、そこでは教会の建て直しと守り固めについて深く考えている時でした。聖書通読は、私たちが聖書知識を蓄える学校ではなく、教会が聖霊によって私たちに、ご自身の言葉を知るために、また互いに仕えるために与えてくださっているものなのです。ですから、分かち合って、悩み合って、そして祈りあって、仕え合う、その心と心の触れ合いの中で知恵と知識があります。

3 節の「獣のようにみなされるのか」という言葉は、ヨブが 12 章 7 節で言った、「獣に尋ねてみ

よ。それがあなたに教えるだろう。」と言った言葉のことを言っているのだと思います。知性を重視するビルダデには、これが侮辱でありました。そして 4 節、「自分自身を引き裂く者」と言っていますが、先にヨブは、「神は怒って私を引き裂き、私を攻めたて(16:9)」と話していましたが、ビルダデは、「何を言っているんだ、お前が怒って自分自身を引き裂いているのだろう。」と突き放しています。最後の言葉はもっとも冷酷です。「あなたのために地が見捨てられようか。岩がその所から移されようか。」というのは、「あなたが騒いだところで、大地が動くわけでもなく、岩もびくりとも動かない。」というものです。

18:5 悪者どもの光は消え、その火の炎も輝かない。18:6 彼の天幕のうちでは、光は暗くなり、彼を照らすともびも消える。18:7 彼の力強い歩みはせばめられ、おのれのはかりごとが彼を投げ倒す。18:8 彼は自分の足で網にかかる。落とし穴の上を歩むからだ。18:9 わなは彼のかかとを捕え、しかけ網は彼をつかまえる。18:10 地には彼のための輪縄が、その通り道には彼のためのわなが隠されている。18:11 恐怖が回りから彼を脅かし、彼の足を追い立てる。18:12 彼の精力は飢え、わざわざが彼をつまづかせようとしている。

ビルダデは、ここで基本的に「あなたが仕掛けた罠は、あなた自身が陥る」ということを話しています。先ほど、なぜ言葉の罠にかけようとしているのかと言っていましたが、ここでは「そうやって罠をしかけたら、自分自身がそこに陥るよ。」と言っているのです。

18:13 彼の皮膚を食らおうとしている。死の初子が彼のからだを食らおうとしている。18:14 彼はその抛り頼む天幕から引き抜かれ、恐怖の王のもとへ追いやられる。18:15 彼の天幕には、彼のものではない者が住み、硫黄が彼の住まいの上まき散らされる。18:16 下ではその根が枯れ、上ではその枝がしなびる。18:17 彼についての記憶は地から消えうせ、彼の名はちまたから消える。18:18 彼は光からやみに追いやられ、世から追い出される。18:19 彼には自分の民の中に親類縁者がなくなり、その住みかにはひとりの生存者もなくなる。18:20 西に住む者は彼の日について驚き、東に住む者は恐怖に取りつかれる。18:21 不正をする者の住みかは、まことに、このようであり、これが神を知らない者の住まいである。

ヨブの家に対して、ほとんど呪いに近い宣言を出しています。13 節で、「皮膚を食らおうとしている」というのは、ヨブの皮膚のことです。そして天幕から引き抜かれてというのも、嵐で家が倒れて息子、娘がいなくなったことを意味しています。そして、14 節で「恐怖の王」と言っていますが、これは死の形容でありましょう。15 節で「硫黄」がまき散らされたというのは、事実、神の火が天から下って、羊と牧童たちが焼き殺されていました。ここまでは、大体これまで起こったこと、またヨブが予期している死についてです。

そして 17 節からは、これから起こることです。彼についての記憶や名が消え去ること、縁戚者がおらず、誰もヨブの名を受け継ぐ人がいないこと、そして周囲はそこに寄り付かなくなること、そし

てそこが神を知らない者の住みかとなること、であります。これは、中東地域また族長社会にいる者たちにとって最も過酷な仕打ちであります。死ぬことについて、どのように丁重に葬られるのかは彼らにとって死活的です。そして、死後にどのように名が残るのかについては、彼らは命をかけます。「だれだれの子、だれだれの子」という名を私たちは旧約聖書の中に見ますが、このような子孫が続くことが極めて重要になるのです。それが無い、という裁きの言葉をビルダデは宣言しました。そして最後に、「神を知らない者」とまで行っています。ヨブは元々神を知らなかったのだ、つまり救われていなかったのだとまで言っています。

エリファズもそうですし、ビルダデもそうですが、彼らは今のヨブの惨状を彼の悪に拠ると裁いただけでなく、知りもしないことを裁いていました。裁くことについて、新約聖書は「裁きなさい」という命令があって、また「裁いてはならない」という命令があります。一見矛盾していますが、客観的な事柄を比較して、そして判断を下すことは、私たちはしていかなければいけません。しかし、イエス様が言われた「裁いてはならない」という言葉は、判断をした後に判決を下すことです。

ところで、ビルダデは「天幕」や「住まい」という言葉をたくさん使っています。ヨブや他の友人も使っていました。これは自分の親密なところ、私的な空間と言ってもよいでしょうか？神との個人的な関係はここから始まります。個人として神に近づくこと、家庭における神との関係、それから外へと向かいます。こうした私的空間にて自分が神と交わっているかどうか、これが問われている訳です。

2B 敵意を打ち滅ぼす方 19

そして 19 章に入ります。ここが友人との議論の中で最も落ち込んでいるヨブであり、また午前中学んだように、最も大胆な信仰の宣言をしている部分でもあります。ビルダデの言葉は、ヨブをますます友から引き離しましたが、それによってヨブは最も神に近づき、神のみを仰ぐようになります。

1C 愛する者の遺棄 1-20

19:1 そこでヨブは答えて言った。19:2 いつまで、あなたがたは私のたましいを悩まし、そんな論法で私を砕くのか。19:3 もう、十度もあなたがたは私に恥ずかしい思いをさせ、恥知らずにも私をいじめる。19:4 もし、私がほんとうにあやまって罪を犯したとしても、私のあやまって犯した罪が私のうちにとどまっているだろうか。19:5 あなたがたがほんとうに私に向かって高ぶり、私の受けたそしりのことで、私を責めるのなら、19:6 いま知れ。「神が私を迷わせ、神の網で私を取り囲まれた」ことを。

ビルダデの言葉に対して、「そんな論法で砕くのか」と言っています。ビルダデの言葉は、論法そのものでした。そして 3 節「十度」とありますが、これは人を試す時の回数として旧約聖書に出ています。何度も、ということ強調しています。そして 4 節ですが、他の訳では「そのあやまちは、わたし自身にとどまる。(口語訳)」となっています。したがって、「たとえ私が誤って罪を犯していたとしても、それは私と神との間でのことだ。この苦しみを受けるような罪ではない。」という意味です。

そして彼らが発した言葉が「そしり」と断じています。そしてビルダデは、彼が自分の仕掛けた網に落ちると話しましたが、ヨブは「神の網で私は取り囲まれたのだ」と言っています。ヨブにとっては、これしか説明のしようがなかったのです。

19:7 見よ。私が、「これは暴虐だ。」と叫んでも答えはなく、助けを求めて叫んでも、それは正されない。19:8 神が私の道をふさがれたので、私は過ぎ行くことができない。私の通り道にやみを置いておられる。19:9 神は私の栄光を私からはぎ取り、私の頭から冠を取り去られた。19:10 神が四方から私を打ち倒すので、私は去って行く。神は私の望みを木のように根こそぎにする。19:11 神は私に向かって怒りを燃やし、私をご自分の敵のようにみなされる。19:12 その軍勢は一つとなって進んで来、私に向かって彼らの道を築き上げ、私の天幕の回りに陣を敷く。

ビルダデが、悪者にする神の仕打ちを、ヨブに当てはめながら 18 章で語りましたが、今は神ご自身がヨブに対して行っているとヨブは言っています。ここの描写は、自分の天幕が、敵に包囲されたものであるかのように描いています。包囲されたので、8 節、道がふさがれています。王冠が取りさらされました。そして、「四方から」とありますが、これは城壁のことです。打ち倒され、壊されます。そして回りの木を、包囲している国は抜いていくのですが、それを行っています。そして陣を敷かれています。

ヨブの初めの叫び、7 節にある叫びですが、「答えがない」「助けを叫んでも、正されない」というのがヨブにとっても最も辛いことでした。彼は望みを探していました。自分の苦しみに対しての答えを求めていました。なぜ、神は私を世に生まれさせたのか？なぜ、神は罪もない人間をこのように罰せられるのか？神の裁きは本当に正しいのか？いろいろ捜しても、見当たらないのです。それを八方塞がりの状態として描いています。このように、苦しみよりも大きな苦しみは、意味や意義が分からないということでもあります。

19:13 神は私の兄弟たちを私から遠ざけた。私の知人は全く私から離れて行った。19:14 私の親族は来なくなり、私の親しい友は私を忘れた。19:15 私の家に寄宿している者も、私のはしためたちも、私を他国人のようにみなし、私は彼らの目には外国人のようになった。19:16 私が自分のしもべを呼んでも、彼は返事もしない。私は私の口で彼に請わなければならない。19:17 私の息は私の妻にいやがられ、私の身内の者らにきらわれる。19:18 小僧っ子までが私をさげすみ、私が起き上がると、私に言い逆らう。19:19 私の親しい仲間はみな、私を忌みきらい、私の愛した人々も私にそむいた。19:20 私の骨は皮と肉とにくっついてしまい、私はただ歯の皮だけでのがれた。

神から八方ふさがりにされているだけでなく、今度は自分の親しい仲間が自分から離れてしまったことを語っています。これは辛いことです、これまで信頼していた人たちが、苦しい時に離れてしまうのです。私たちは、たった一人から何か連絡がなかったりすれば、辛い思いをするのに、ヨブ

はそれを何十倍も多く受けています。そして、自分の肉体の状況も話しています。この病のために、酷い口臭がしているのでしょう、そのために妻や身内の者たちにも嫌がられています。そして、今、歯肉がわずかに残っているだけで、他は骨が皮にくっついてしまっているような状態です。

私はイエス様のことを思います。7 節から 12 節においては、まさに父なる神がご自身に敵対された、十字架上の出来事を思います。そして今読んだ 13-20 節は、弟子たちがご自身を見捨てたことを思い出します。そしてヨブの肉体の変化は、イエスご自身の肉体が殴られ、鞭で打たれ、そして十字架に釘さされたことを思います。ヨブの究極的な痛みを見ると、痛みを受ける時に慰めを受けますが、イエスが受けられた痛みは、それ以上に私たちを慰めます。

2C 生きておられる贖い主 21-29

19:21 あなたがた、私の友よ。私をあわれめ、私をあわれめ。神の御手が私を打ったからだ。
19:22 なぜ、あなたがたは神のように、私を追いつめ、私の肉で満足しないのか。19:23 ああ、今、できれば、私のことばが書き留められればよいのに。ああ、書き物に刻まれればよいのに。
19:24 鉄の筆と鉛とによって、いつまでも岩に刻みつけられたい。

友人に憐れみを訴えかけています。これだけ肉体で苦しんでいるのに、なぜ、なおのこと私を追いつめるのかと問いかけています。そしてついにヨブは、友人との議論の中で、クライマックスとなる信仰の爆弾発言をします。彼は分かっていました、これが友人だけに語られるものではなく、書きとめられ、刻まれて、いつまでも残る、普遍的な真理になるのだということです。

19:25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。19:26 私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。19:27 この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。

先ほどエリファズに対しては、大胆にも天に自分に代わって主張してくださる、保証人がおられることを話し、ここでは保証するだけでなく、贖われる方がおられることを大胆に宣言しています。午前礼拝のメッセージをぜひ聞いてください。保証する、仲裁するとは、自分が罪に定められることのないように保ってしてくれる働きです。しかし贖うというのは、罪に定める敵を踏み潰して、もう責められることのないようにする、ということです。そして、保証人は天におられますが、贖い主は地上に来られます。保証人の場合は、天において地で起こっていることを守っているのですが、贖い主の場合は、この地そのものを天にあるように御心のままにすることです。そして、ヨブは肉体をもって神を見ます。天において魂の安息を得るだけでなく、肉体が復活し、その体で神を見るのです。そして、この強い高揚感をもって、友人たちに強く迫ります。

19:28 もし、あなたがたが、事の原因を私のうちに見つけて、「彼をどのようにして追いつめようか。」と言うなら、19:29 あなたがたは剣を恐れよ。その剣は刑罰の憤りだから。これによって、あなたがたはさばきのあることを知るだろう。

ヨブは、完全に自分の潔癖さが証明された暁には、友人たちが誇ったことについて神からの刑罰があると宣言しています。この部分は、最後に神がヨブに指導を与えています。神は、友人たちに、ヨブに祈ってもらえと言いました。そしてヨブが彼らのために祈ったら、ヨブの財産は回復したという話になります。つまり、ヨブは回復するのですが、その時に敵に復讐するのではなく、敵を赦すのです。

ヨブにとって、神が主権者であり、それゆえに自分に敵対していることを、これでもかというばかりに吐き出しながら、保証人にして臆い主にしても、こんなにも大胆に自分の味方をしてくださると語っています。これに矛盾がないのか？ないのです、ヨブは神を知っており、神の真実を語っていたのです。神は矛盾の中に真実を宿しておられます。神は聖なる方であり、罪を憎まれます。しかし、神は同時に憐れみ深く、怒るに遅い方です。神は、すべての物を超越し、いと高き所におられる方ですが、同時に、あらゆるところに偏在し、実に私たちの呻き声一つ一つにも耳を傾けておられる方です。そして、キリストの十字架がその矛盾を一つにしておられる神の真実であります。

罪に対して神は容赦しません。神は私たちのあらゆる罪を明らかにされます。神は見逃されるだろうと思われるなら、いいえ、必ず明らかにされます。今、罪を告白し、悔い改めなければいけません。しかし同時に、神は罪を覆われ、罪を取り除き、罪がなかったことにして下さいます。それは、先に話したように、罪がないのに罪ある者として肉体に病を負わせられた神の矛盾が、十字架の上にあるからです。ヨブの苦しきは、キリストご自身の苦しみでありました。しかし、キリストご自身も父なる神を知っておられたので、この矛盾を御心の中で受け入れることができたのです。